平成25年度
鹿児島大学
FD報告書

鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

平成25年度　鹿児島大学FD報告書

CONTENTS

Ⅰ. 平成25年度FD報告書作成にあたって

■ ＦＤ委員会委員長（教育担当理事） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ. 鹿児島大学のＦＤ活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第1部 全学的取組

■ 新任教員ＦＤ研修会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

■ ＦＤ・ＳＤ合同フォーラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

■ 学生・教職員ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

■ 鹿大版ＦＤガイド第6号、第7号の発刊にあたって ・・・・・・・・ 26

■ 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査
（2012年度調査報告） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

■ 学生支援研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

■教育センター高等教育研究開発部（共通教育）のＦＤ活動 ・・・ 34

第2部 各学部・研究科のＦＤ活動報告

■ 法文学部、人文社会科学研究科

■ 教育学部、教育学研究科

■ 理学部

■ 医学部

■ 歯学部

■ 工学部

■ 農学部、農学研究科

■ 水産学部、水産学研究科

■ 共同獣医学部

■ 理工学研究科

■ 医歯学総合研究科

■ 保健学研究科

■ 司法政策研究科

■ 臨床心理学研究科

■ 連合農学研究科

I 平成25年度FD（ファカルティ・ディベロップメント）報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事）
清原 貞夫

本報告書は「教育センター年報」から独立して4年目の報告となりました。鹿児島大学のFD活動は、各学部の教育研究職員、教育センターの先生方、職員の方々の協力の下、年間に実施する事項なども定着し、それぞれの目的に向かって企画実施されてきました。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成すべく、教員個々の教授法の開発と授業力アップ、そして学生支援が中心です。昨今さらに、カリキュラム・プログラムの開発、教育環境および教育制度の開発などへの提言も求められてきています。平成22年度以降のFD委員会の活動の詳細はHP（http://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html）をご覧ください。平成25年度は、4つのワーキンググループ「FDガイド、実態調査」「FD研修会・講習会」「FDフォーラム」「学生・教職員ワークショップ」を設け、すべての委員が必ずどれかに属して、企画・運営に携わっていただきました。

継続的な取組として、新任教員FD研修会、FD・SDフォーラム、鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査報告書の発行、そして学生・教職員ワークショップ『自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進』が行われ、FDガイド第6号、第7号も発刊されました。また、これまで新入生オリエンテーション説明者講習会を兼ねて3月末に実施していた教育・学生支援担当教職員講習会は、平成25年度は、学生支援研修会として実施し、前田芳實学長から本学の学生支援体制についてご講演いただき、保健管理センターの川池先生からは、保健管理センターの学生相談と学生支援についてご講演いただきました。このように、継続は力であり各事業少しずつ改善が加えられ、向上している様子がみてとれます。

FD活動は、教職員個々人の向上意識と自発的な取組が不可欠であります。教育を改善する活動には多大な時間と労力がかかると思います。そして想像力と創造力が必要でもあります。授業力アップには各教員の最も大切にする価値や活動に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは、各教員の研究領域・活動であると思います。したがってFDでは、研究活動と教育は密接に関与することを自覚し、職務遂行力の向上とキャリア形成を念頭に、教職員の全員が一歩一歩、粘り強く、研究・教育活動を推進していっていただきたいと念じています。

平成25年度　FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観（6/17～6/28）
9月	新任教員FD研修会（9/24）
	鹿大FD報告書（平成24年度）作成
10月	FD・SD合同フォーラム（大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催）（10/5）
	共通教育後期授業公開・授業参観（10/28～11/8）
11月	教育センターオープンクラス（11/25～11/30）
	鹿大版FDガイド第6号の作成
12月	学生・教職員ワークショップ（12/17）
	共通教育における学習実態・学習成果に関する調査　2012年度調査報告書作成
2月	FD関連図書「鹿大の授業を改善しようコーナー」設置（附属中央図書館）
3月	学生支援研修会（3/26）
	鹿大版FDガイド 第7号の作成

平成25年度　FD委員会委員

所　属	氏　名	所属ワーキンググループ
理事（教育担当）	清原 貞夫	
学長補佐（教育担当）	有倉 巳幸	FDフォーラム
教育センター長	飯干 明	FDフォーラム
教育センター副センター長	富原 一哉	学生・教職員ワークショップ
教育センター高等教育研究開発部長	佐久間 美明	FDガイド、実態調査
教育センター高等教育研究開発部	渋井 進	FDフォーラム
教育センター高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子	FD研修会・講習会
法文学部	柿内 一樹	FDフォーラム
教育学部	中嶋 哲也	学生・教職員ワークショップ
理学部	青木 敏	学生・教職員ワークショップ
医学部	藤野 敏則	FD研修会・講習会
歯学部	田口 則宏	FD研修会・講習会
工学部	本間 俊雄	FDフォーラム
農学部	西野 吉彦	FD研修会・講習会
水産学部	小松 正治	FD研修会・講習会
共同獣医学部	松尾 智英	FDガイド、実態調査
理工学研究科	本間 俊雄	FD研修会・講習会
医歯学総合研究科	田川 まさみ	学生・教職員ワークショップ
司法政策研究科	小栗 實	FDガイド、実態調査
臨床心理学研究科	安部 恒久	FDガイド、実態調査
教育センター外国語教育推進部長	髙橋 玄一郎	学生・教職員ワークショップ

II

鹿児島大学のFD活動

第1部

全学的取組

新任教員FD研修会報告

1. 概要

テーマ　アクティブ･ラーニングを促すシラバス設計
日　時　平成25年9月24日(火)　13:00～16:30
場　所　郡元キャンパス 稲盛アカデミー棟１階　A11教室
対　象　平成24年7月2日～平成25年7月1日採用の新任教員
参加者　35名
目　標　学生の主体的な学習を促す授業設計について理解する。

2. 研修会の趣旨

平成24年8月に中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」が示された。そこで、学生の主体的な学習時間の実質的確保と増加、アクティブ･ラーニングへの転換が強く求められている。こうした点を踏まえ、学生が主体的に学べるようにするためのシラバス作成の留意点、有効な教育方法などについて考える機会と位置付けられる。

3. 当日のプログラム

13:00～13:10	開会挨拶
13:10～14:00	小講演「『アクティブ･ラーニング』とは何か」および事例紹介
14:00～14:30	グループ活動①:アクティブ･ラーニングに関する意見交換
14:30～14:50	休憩
14:50～15:40	グループ活動②:「鹿児島探訪」のシラバス(サブタイトル･到達目標･授業概要･評価方法)作成
15:40～16:20	発表･意見交換
16:20～16:30	全体のまとめ

4. 研修会のまとめ

アクティブ･ラーニングの事例紹介としてクリッカーを使用した授業の進め方が紹介された。その後、アクティブ･ラーニングを取り入れた形式で参加者5～6名ずつの6グループを形成して、グループワークを実体験していただいた。グループワークでは、“鹿児島の魅力を外国人にアピールする”、“桜島を世界遺産に登録する”、“水とともに”、“焼酎を造る”、“食と文化に関するパンフレットを作成する”、“鹿児島を売り込め”、といったサブタイトルの「鹿児島探訪」のシラバスを作成し、それについてのプレゼンテーションを行っていただいた。参加者からも指摘があったが、アクティブ･ラーニングは、その評価方法が確立されておらず、今後の検討課題としてアクティブ･ラーニングの評価方法をより工夫する必要があると思われる。

今回の研修会において、これまでの教育経験の全くない新任の先生が参加者全体の約3分の1を占め、シラバス作成を実際に経験していただいたことにより、教員と学生の双方向型授業を強く意識づけ、それぞれの先生方の部局及び共通教育における授業の質の向上に役立つものと期待される。

（文責：水産学部　小松 正治）

FD・SD合同フォーラム

1. 概要

テーマ　発達障害学生の理解と授業支援を考える
日　時　平成25年10月5日(土)　13:00～16:30
場　所　郡元キャンパス　稲盛会館
参加者　140名(参加校:鹿児島純心女子大学、志學館大学、鹿児島女子短期大学、鹿屋体育大学、鹿児島純心女子短期大学、第一工業大学、鹿児島国際大学)
主　催　大学地域コンソーシアム鹿児島、鹿児島大学FD委員会

2. 基調講演

「発達障害学生に対する修業支援～合理的配慮の探究～」

講師:西村 優紀美氏
(富山大学学生支援センター・アクセシビリティ・コミュニケーション支援室長)

はじめに、本講演内容の主な項目は次のとおりである。なお、これは講師から示されたものではなく、筆者が独断で整理したものであることをお断りしておく。

(1)発達障害学生支援に関する社会的な動き
(2)大学等における発達障害学生数等
(3)発達障害の種類や学生生活上の問題等
(4)合理的配慮と発達障害者支援における特有の問題
(5)富山大学における発達障害学生の支援体制と特長
(6)富山大学における支援事例
(7)まとめ、付録(教育・指導上のヒント、安定した修学を支える居場所づくり)、参考資料等

以下では本講演の中心テーマである(4)と(5)について要旨を述べていく。

文部科学省の「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)」(平成24年12月)では、全ての障害種を対象に合理的配慮を求めている。
合理的配慮の定義については、「大学等が必要かつ適当な変更・調整を行う」、「大学の体制面、財政面等において、均衡を失した又は過度な負担を課さないもの」とし、その決定に当たっては、学生本人を含む関係者間で、可能な限り合意形成・共通理解を図ることが望まれ、根拠資料(障害者手帳、診断書等)の提出を求めることが重要としている。

しかし、発達障害に関しては他の障害と異なり次のような特有の問題がある。

●医学的診断のある学生は少なく、それを条件にすると支援のタイミングを逃してしまう。
●自己理解が進んでいない場合、学生が主体的かつ適切に自らの修学に関する配慮要請を行うことが難しい。
　→発達障害学生が自身に必要な配慮を理解していく過程をサポートする必要がある。
●困難さに個人差が大きく、必要な配慮も異なり定型化ができない上、状況によっても必要な配慮が異なる。
　→本人と支援者（教職員）の双方が納得できる配慮を、試行錯誤を重ねながら探求する必要がある。

富山大学では、障害のある学生の支援担当部署として、アクセシビリティ・コミュニケーション支援室（HACS）を学生生活支援センター内に設置し、ここで、発達障害学生の支援も行っている。（保健管理センターに置かなかったのは、学生が相談に来やすいようにとの配慮からである。）

発達障害学生支援の特長は次の３点である。

(1) トータルコミュニケーションサポート

1）診断の非重視
支援対象者を「高機能発達不均等」学生と定義し、医学的診断の有無にかかわらず、対人関係やコミュニケーションにかかわる困りごとを支援の出発点とする。

2）マルチアクセスの確保
学生が容易にアクセスできるよう複数の支援チャンネルを用意

3）メタサポート
HACSは学生をサポートしようとする教職員や保護者をサポート

4）シームレス・サポート
入学前・入学直後から卒業後の就職定着まで支援（オープンキャンパスでの相談窓口設置、大学生活の体験プログラム実施等）

(2)支援を通じた合理的配慮の探求モデル

次のサイクルをまわしながら、「とりあえずの支援方策」から「支援目標の漸進的改善」を図っている。

●ナラティブ・アセスメント
本人が困っていること、本人の努力がなぜ報われないかを聞き取り、本人の視点から物語化
↓
●コーディネーション
本人（学生）と支援者（教職）の視点をつなぎ、双方が納得できる配慮を探る。
↓
●合理的配慮づくりと評価

(3)チーム・サポート

1）情報共有の範囲を一律に設定せず、柔軟に設定・変更（本人・保護者合意のもと）
2）集団守秘義務の考え方を適用
3）合理的配慮は、前もって定めることにこだわらず、本人も含めたサポートチームが合意形成を図りながら探求

（文責：法文学部　柿内 一樹）

3. パネルディスカッションの概要と総括

今回のパネルディスカッションは、「発達障害学生への授業支援を考える」というタイトルで、3件のパネリストからの事例報告の後、コーディネーター及びコメンテーターの先生からパネリストへの質問・コメントがなされ、その後フロアとの質疑応答が行われた。

まず1件目の事例報告は鹿児島大学保健管理センター長の伊地知信二氏から、「鹿児島大学における発達障害学生支援」についての報告がなされた。鹿児島大学の保健管理センターにおける学生支援の現状についての報告であり、平成21年度以降支援件数が急激に増加している現状や、全国における発達障害学生支援の現状の件数との比較においてほぼ10倍である現状が説明された。また、具体的な取組について多数の写真を示しながら、相談状況、イベント等を通しての居場所の提供、留学生との学生交流の状況、ソーシャルワーカーによる個別の自宅訪問、個別学習環境の提供、履修申請の補助、卒業論文発表のサポート、就職面接のサポート、などの多角的な取組について紹介を行った。まとめとして、皆が同じ場で共に学ぶという方向性で、包括的に支援を行う必要性が示された。

2件目は、志學館大学参与の有川宣明氏から「発達障害学生の授業支援—志學館大学の取組」と題する報告がなされた。修学アドバイザーという立場からの経験を踏まえ、志學館大学の学生支援センターの成立の経緯や役割の変遷、現在の組織体制について説明がなされた。具体的な取組として、発達障害学生の把握、支援ニーズの確認、支援計画の作成と周囲への配慮の要請、支援計画の評価と修正、というステップごとに具体的に取組が説明された。

3件目は、鹿児島大学教育学部准教授の片岡美華氏から「個への授業支援とユニバーサルデザイン」というタイトルの報告がなされた。ここでは、障害学生に対して、具体的な授業支援について、教員がどのように対処して行くことができるかについて、卒業論文・ゼミ活動、教育実習という場面における例も示しつつ説明がなされた。次に、学習面、生活面、環境面という全体の環境を整えることで支援を行うユニバーサルデザインが必要である、という解説がなされた。ユニバーサルデザインとは、調整又は特別な設計を必要とする事なく、最大限可能な範囲ですべての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計を意味している。この概念の教育への導入の有効性が、学習環境の整備や授業の工夫についての具体的な事例を含めつつ解説された。

上記3件の報告の後、大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会長である鹿児島大学教育学部教授の有倉巳幸氏をコーディネーター、基調講演を担当された富山大学学生支援センター・アクセシビリティー・コミュニケーション支援室長の西村優紀美氏をコメンテーターとして、ディスカッションが行われた。

まず有倉氏から、本日の3名のパネリストの報告事例における論点の整理がなされた。その上で、特に個々の学生への支援から全学レベルでの支援への必要性が提示され、パネリストに対してどのように対処して行くべきかの質問がなされた。伊地知氏からは、コーディネーターを含めた全学としての組織体制の整備の必要性について言及された。有川氏からは、教職員からの発達障害学生の“気づき”の連絡体制整備の有効性が示された。片岡氏からは、発達障害が多様である事を考慮すると、支援する側もスタッフのグループとして多様な体制で取り組んで行く必要性が示された。

また、議論の中で、学生自身が自己をメタ的に把握して客観的に向き合う必要性についても話題にあがった。それは障害がある学生のみならず全ての学生に必要であろうという意見も出された。

その後フロアからの質問がなされた。サポートが必要な学生に対して、入学時に支援が必要な学生についてどのような把握が行われているかについて質問がなされた。これについては、伊地知氏および有川氏からUPI、CMIというスクリーニングテストの実施状況等について解説がなされた。また、障害に自覚が無く、周囲も気づくことが

できない学生を考慮した評価について、どのように対処していくべきかについて質問があった。これについて、西村氏からは、試験問題の出し方等でのユニバーサルな視点からの工夫が、例として示された。また、障害については周囲の理解を含めた体制の整備が必要である事も話題として挙がった。

最後に、西村氏による議論の総括及び今後の展望が示された。教員の個性と専門性を尊重しつつ、教員の工夫を盛り込むように個々のケースを大切にしながら支援をしていくことの重要性が示された。また、学生それぞれの学び方の違いや、表現の違いについて学生自身が理解することで、自分の在り方に自信を持たせるような形での学び方の重要性が指摘された。また発達障害学生へのキャリア教育の必要性についても示された。

（文責：教育センター　渋井 進）

学生・教職員ワークショップ

1. 概要

テーマ 自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進

日時 平成25年12月17日(火)　16:10～19:10

場所 郡元キャンパス　共通教育棟2号館1階　212・213号教室

参加者 63人(学生31人、教員24人、職員8人)

対象者 教育に関心のある本学の学生、教職員

学生…各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者
教員…各学部、施設の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員
職員…各学部学生系職員、附属図書館、学術情報基盤センター等施設職員、学生部職員

目標 ワークショップ終了時に、参加者は、学生が主体的に学習することの重要性と大学の役割を理解し、授業、制度、教育環境の改善を提案することができる。

大学の目指す望ましい教育を実現するために、FD委員会では教職員が学生とともに討議する「学生・教職員ワークショップ」を毎年開催している。本年度は昨年度に引き続き「自主的な学習」をとりあげる。学生の主体的な学習は望ましい学習成果を生み出し、自主的な学習習慣が生涯学び続ける社会人の基盤となる。鹿児島大学では「自主自律と進取の精神」の涵養を掲げて自立した学習者の育成を目指しており、全ての教職員、学生が協力して学習の環境を整備していく必要がある。

本ワークショップでは、本学の事例紹介と改善計画立案を行い、参加者が自主的な学習の必要性と具体的方法を理解して日々の教育活動に活用できるように企画した。また参加者が今後部局の教育改善やFD・SD活動の推進役、支援者となることにも期待した。

2. 内容とスケジュール

司会進行　高橋玄一郎（FD委員）

時　間	内　　容	
16:10	開会	清原貞夫FD委員会委員長（教育担当理事）
16:13	「自主的な学習」について	田川まさみ（FD委員）
16:25	事例紹介（1） 中谷純江　先生　（国際連携推進センター） 受講生：趙媛媛（工学部2年）、喜成優太（水産学部1年） 共通教育「グローバル社会を生きる」	
16:45	事例紹介（2） 有馬一成　先生　（理工学研究科） 共通教育「有機化学基礎」	
17:05	テーマ別グループ討議　説明 グループ討議 発表	中嶋哲也（FD委員） FD委員
19:00	アンケート	
19:05	まとめ	富原一哉（FD委員）
19:10	閉会	

グループ別テーマ

①学習すべき内容（指導すべき内容）をいかに指導（学習）するか？

定められた学習項目を学生が興味、関心を持って主体的に学び、より良い学習成果をあげる教育の改善計画（指導方法改善、学生との連携など）を検討する。

必修科目（専門科目、専門基礎科目等）改善を主に想定する。

②「市民として行動できる能力」「専門能力」を培う多彩な科目により、自主的な学習のできる機会を提供できるか？

学生の関心・興味に応じて選択できる多彩な科目や、学習内容、学習方法を学生が選択・計画できる科目の提案と実現のための方策を検討する。

選択科目、共通教育科目の改善を主に想定する。

③自主的学習を推進するための学習環境、学習文化をいかに実現するか？

授業の理解、自習での問題解決を支援する教職員と学生の対応、学生同士の学習支援（ピア・サポート）制度、必要な資源（設備や資料等）の提供を検討する。

3.結果概要

(1)事例紹介の内容

1)共通教育「グローバル社会を生きる」

国際社会の抱える問題に対して受講生が自分なりの意見を持つことと、異なる立場の人との議論をとおして問題の複雑な諸相に気付くことを目標に、受講生がワークショップによる議論を重ねながら調査研究、プレゼンテーションを行っている。等

2)共通教育「有機化学基礎」

対象である歯学部1年生が専門教育を学ぶために必要となる基礎力を自主的に学んで修得するために、受講生の要望を取り入れた講義を行っていること、講義の内容や分量等を毎年見直している。等

(2)グループ討議の主な内容

参加者は7グループに分かれ、3つの中から事前に割り当てられた1つのテーマについて討議を行った。

①学習すべき内容(指導すべき内容)をいかに指導(学習)するか?

①-1グループ

現状の問題点、改善項目

●学生が主体的に学習するためにはどのような授業をすれば良いのか?

提　案

●学生が自身の将来で必要であると感じれば学習意欲が上がる。
●それを感じさせるために「何で必要なのか?」という内容のイントロダクションの授業を行う。
●カリキュラムマップを利用して、将来へのビジョンをもたせる。
●専門の先生と1年生のときから話ができやすいようにする。
●先生に質問しやすい環境をつくる。
●インターンシップ(現場)に行かせる。

①-2グループ

現状の問題点、改善項目

●教材の悩み
●シラバスの方針
●受ける科目がかたよる。
●システムが分からないままの履修登録
●シラバスでしか内容を見られない。(決める材料)
●学年が上がらないと、何が必要か分からない。
●単位を取らなければ、進級できない。

提　案

- 具体例を出し、興味を持てるような導入を行う。
- 専門科目から先に入ることで、科目と科目のつながりが見える。
- 同じ学部の先生、学生間で授業を行う。(学部により考え方が違う。)
- 授業の目的を明確にしておく。
- 学年が上がっても、共通教育を履修できるようにする。(時間を設ける。)
- 科目の連続性マップの作成。(1期～6期の講義。配属先が決定しやすい。共通教育科目との関連も付けると良い。モチベーションが上がる)
- 大学の先生と高校の先生と繋がりをつける。(大学のシステムを伝え、ミスマッチを減らす。)
- 学科名をシンプルにする。

①-3グループ

現状の問題点、改善項目

- 内容や導入の仕方によって、興味の持ち方、モチベーションに各教員で差がある。
- 学力の低下とニーズの多様性
- 学生の興味に合わせた内容に合わせられない。
- 学生が合理主義的な行動をとる。
- 学生の心構えが足りない。
- 基礎知識に時間を多くとっている。
- 学生が意欲を持てていない。
- 学生のニーズに合っていない。
- ニーズに合わせたものだけ教えればよいのか。

提　案

- カリキュラムを改定して、専門的なことが選択できるようにしてモチベーションを上げたい。
- 専門科目を早くから受けられるようにすることで、現実的な発想で先を見越せるようにする。
- モチベーションはある程度、自身も行動を起こす。
- アクティブな学生に対しては、教員側が手を差し伸べて、さらにやる気を持たせる。
- ビジョンを明確にする。
- 事例だけを示すのではなく、パフォーマンスを取り入れていくべき。

②「市民として行動できる能力」「専門能力」を培う多彩な科目により、自主的な学習のできる機会を提供できるか？

②-1グループ

現状の問題点、改善項目

- 受けたい授業が受けられない。
- より面白い授業が聞きたい。
- 現状の授業に不満。

提　案

- ●単位認定を柔軟に行うことで、同じ時間帯にある科目を複数受けられるようにする。
- ●事務職員が実経験を話す授業を行うことで、大学生活がどのように運営されているのか、どうやって大学職員になれるのか、等がわかる。
- ●インターネットを利用するなどし、抽選に漏れて授業が受けられない現状を打破する。
- ●テスト廃止（出席のみで単位認定）、毎回小テスト or 感想レポートにより受講したい。興味ある科目のみ取れるようになる。現状では、単位を取りやすい授業に集中してしまう。
- ●GPAをもっと活用する。
- ●より面白い授業を行える教授を外部からよぶ（海外の方を含む）。より生きた内容の授業を聞きたい。

②-2グループ

現状の問題点、改善項目

- ●学生が、講義の内容よりも単位の取りやすさで講義を選択する傾向にある。その傾向が、学習意欲の低下をも招いている、と考えた。
- ●そこで、シラバスをもっとフレキシブルに変えられるようにして、学生の意見を取り入れた講義を実現すべき。

提　案

- ●シラバスを、もっとフレキシブルに変えよう！
  - → 講義の進み方や、学生の興味、関心の向きに応じて、講義の内容等をある程度変更できるようにすべき。
  - → アンケートやMoodleを活用し、学生の意見を講義に反映させる。その結果、学生の参加意識を促し、自主的な学習の意欲を増進させる。
- ●シラバスの変更の際の約束事
  - → 記載の形式は守る。
  - → 授業の最終目標、評価の方法は変更しない。
  - → ある程度、各回の道筋を提示する。
  - → シラバスの内容から、実際の講義の内容を変更する場合があることを学生に認知させる。
- ●講義選択の際、重要なシラバス。シラバスに、教員の写真や講義風景の写真等を載せることで、興味、関心を引く。

③自主的学習を推進するための学習環境、学習文化をいかに実現するか？

③-1グループ

現状の問題点、改善項目

- ●教職員への質問のためにアポが必要　→　質問しづらい。
- ●図書館の専門図書の不足。
- ●課題解決型の授業が増えたほうがよい。（自主的にならざるを得ない。）
- ●学生同士で自習できる環境がない。
- ●自習室の開放時間が短い。
- ●レポートが重なりすぎ。

●Moodleの使い方がわからない。
●2つの空間（学生同士で話せる空間と、静かな空間）
●ピア・サポートが知られていない。
●ピア・サポートの必要性を感じない。

提　案

●学習交流プラザの広報（来年夏に利用可）　共通教育での利用（低学年）
●学部学習室、自習室の利用環境改善。（土日も使える。利用時間の改善）
●ピア・サポートの広報。
●学習交流プラザ、学部自習室に求めるもの
→異なるニーズに対応（学生同士で話せる空間。静かな空間）
→長時間の利用。1年次からも利用可。

③-2グループ

現状の問題点、改善項目

●学習意欲をどうしたら高められるか
→興味がないと学習しない。
→テストが近づかないと学習しない。
→実習など実体験がないと、危機感や意欲がわかない。
●学習しやすい施設、環境作りとは何か
→グループ学習室が少ない。
→自習室の存在や内容
→ゼミ室の環境差
→学生の疑問に対する問い合わせ先がまとまっていない。（組織が縦割り）
→Moodleをうまく使えない。

提　案

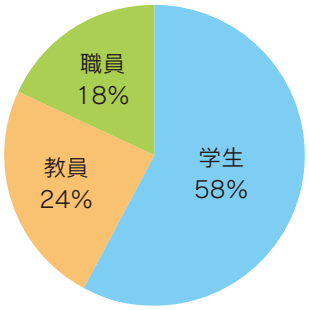
●映像つきの授業コンテンツ。（予復習ができる）
●学生に学習グループをつくり、役割をもたせる。
●定期テストをモチベーションアップにはかる機会にする。
●早くから、学生が実習などで現場に触れ合う機会を多くする。
●学生がネット上にマイページを持ち、様々なシステムの利用や確認ができるようにする。窓口を集約。
●教員、学生、ともにMoodle講習会を受ける。システムを簡易にする。
●地域に（大学以外に）学習環境を設ける。単純に施設を増やす。
●ガイドラインをつくる。

（3）参加者への事後アンケート結果

①参加者

（グループ討議）

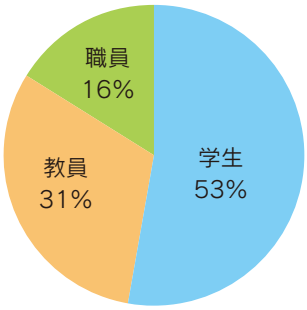
学　生	29人
教　員	12人
職　員	9人
	50人



（アンケート回答者）

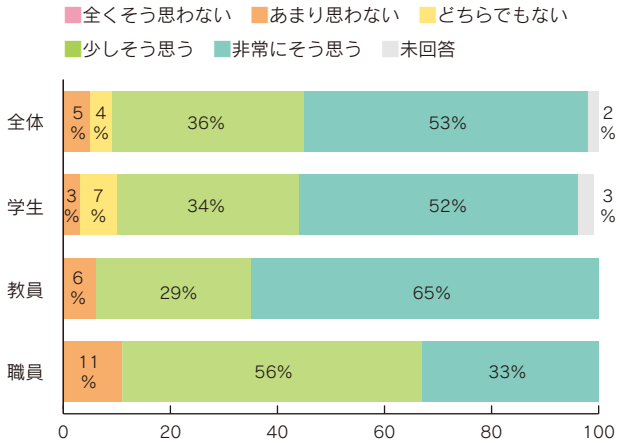
学　生	29人
教　員	17人
職　員	9人
	55人

※教員には FD 委員タスクフォースメンバーも含む



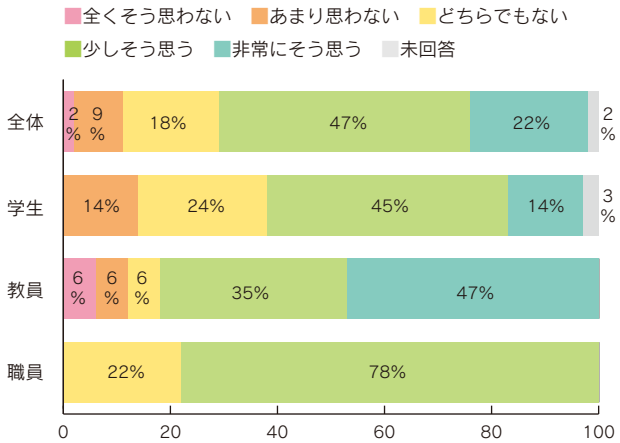
②本日のワークショップは有意義でしたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	0	0	0	0
あまり思わない	3	1	1	1
どちらでもない	2	2	0	0
少しそう思う	20	10	5	5
非常にそう思う	29	15	11	3
未回答	1	1	0	0
計	55	29	17	9



③あなたは、積極的に参加しましたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	1	0	1	0
あまり思わない	5	4	1	0
どちらでもない	10	7	1	2
少しそう思う	26	13	6	7
非常にそう思う	12	4	8	0
未回答	1	1	0	0
計	55	29	17	9



④このワークショップに参加して、何が得られましたか。

学生

- 学部の異なる同世代の大学教育のあり方に対する考え方がとても近いものであったのに驚きました。アーリーエクスポージャーを行っているのは、自分の学部だけだと思っていたのですが、他の学部でも行われているようで、大学の教育方針は納得がすべていくものとはいえないでも、学生視点にたって構成しているのだろうなと思われました。
- 学生と教員双方の考えを聞くことができた。また、学生という立場でこれから取り組んでいくべき課題を見つけることができた。
- 同じ授業でも、教員と学生ではとらえ方が違うということ。ほとんどの学生が、1・2年生の間にやる気を失っていること。主に原因は共通教育のようだった。
  日本の学生の将来ビジョンの見通しのなさ、目的意識の低さ。自分も卒業や就職活動が近づいてからビジョンが固まったが、同級生でも今もまだ固まらない・定まらない人をみていると大丈夫なのかと心配になる。
- 大学での教育について、多くの人がどのように感じ考えているのかを知る良い機会となった。今後、学生との接し方を考慮し、教育の手助けになれるようにしたい。
- スッキリした。多くの人の意見を聞くことができてよかった。
- ワークショップで意見を出しあい、まとめていくことが面白いと感じました。
- 教授側の視点
- 普段、教職員の方々と対等に話をする機会は中々ないので、とてもいい機会だったと思う。色々な考え方や意見を聞くことができ、面白かった。
- 自主的な学習をつくる、ということを、一歩外側から見る視点を得られたと思う。
- 自分の授業に対する態度を見直すことができた。先生方の意見も聞くことができたのでよかった。
- いろんな学部の学生さんが自分の将来のためにいろいろと行動していることを知りました。先生方が自分たちの将来のためにいろいろと考え計画されていることを知りました。
- 大学の問題点と現状・他の人がどう思っているか・授業のめざすべき方向
- 来年から大学院に進学するのですが、1年次の入学後と同様に、学びたい科目を選択できるようになるので、今後の科目を選択する上での先生方の考えや学習に対する取組みを材料にしようと思いました。
- 授業を受ける側と、授業を開催する側それぞれに苦労があることを知った。また、それを互いに知る機会がないんだなということも同時に分かった。
- 学生と教員の考え方の違いが分かった。
- 学習環境に関する様々な視点からの意見があり、学習方法を改善することができそうな気がした。
- 同年代の人たちの様々な意見、教職員の方々の学生を思う気持ちを知ることができてよかった。
- 学生、教員、事務それぞれの立場の意見も聞けたので、今までとは見方が変わってくると思う。たとえば、教員をもっと使っていいだとか(質問など)、要望を言いやすくなるだとか。
- 主体性。また、様々な方面からの意見を聞くことができてよかった。同じテーマだけではなく、それぞれのテーマで話し合ったことの報告をきくことで、とても面白いと思った。
- 普段あまり接することのない方々の話を聞くことができたので、講義に対する思い入れや姿勢が大きく変わってくると思う。
- 教職員が、学生のために色々されていることを初めて知り、うれしかった。そこから、1つ1つの環境って、何を考えてつくられたのかと想像すると、利用してみようという意欲や活用の仕方が分かった気がする。
  学生の生の声(他学部のもの)を聞いて、共通した問題が多くあり、もっと声を大にして働きかけようと思った。
- 「学生の自主的な学習の機会」について初めて真面目に考えたことで、自分自身のこれまでの学習方法を振り返る機会にもなりました。
  学生といわず、この先何かを学ぶ機会には、今日の事を思い出すと思います。「学びの姿勢」がどうあるべきか、問い直すことができました。
- 学生の理想と実際の状況は大きく異なる。多くの問題点があげられたので、少しずつ解決すべきである。

●先生ともっとコミュニケーションをとる。鹿児島の人はあまり質問をしないので、もっとすべき。大学をもっと使ってもいい。積極的に意見を言える環境だったらいいと思う。
●一つのテーマで学生と先生の間で本音を言い合い、それぞれの意見を一つにまとめることで、教育の課題を解決するのに必要な知識を得ることができた。また、先生とのコミュニケーションもとることができた。
●学生と教員とのギャップ・大学講義の現状・教員もそれぞれ思う点はあるということ
●教員側の考え、意見を聞くという機会がこれまでなかったので、とてもいい機会となりました。教員と学生間の考えのギャップが明確となった。
●先生方がどういう点に注意して指導を行っているかがよく分かった。指導する側、学ぶ側の考え方に大きな差があることが分かった。まずは、こういった場があることを知ることができてよかったが、ここで話し合った結果がちゃんと反映されていることが分かればなお良いと思う。

教員

●学生の考えを聞けた感じがする。
●学生が大学の教育に対して、どのように考えているのかがわかりました。また、大学と学生の間には様々な場面で情報が十分に伝わっていないことも分りました。
●学生さんの思い・他学部の先生方の考え
●学生さんと教員の間に、考え方のギャップが大きい。
●具体的にはよくわからないけれど、場があれば学生は積極的に発言できるという実感。
●より良い教育を行うために検討すべき課題を把握することができた。
●学生の考えが理解できた。
●学生をいかに講義に巻き込むのか、そのヒントを中谷先生のご発表からいただけたと思う。
●学生と職員の前向きなディスカッションが見られてよかった。
●学生は１年生から専門教育を受けたいと思っている。基礎教育を担当する教員は、その講義の意義や専門へどうつながっていくかを講義の端々に入れて学生のモチベーションをキープするようにするべきだとわかった。
●学生が自分たちの意見を聞いて欲しいと考えていることが、理解できました。
●理学部の先生のご講演が素晴らしかった。
●日頃から学生の声を聴くことが重要だと再認識できた。
●学生からの意見や要求を具体的に聞けたこと、特に教員が気づいていない点を聞けたことが大きい。
鹿児島大学の学生もちゃんと討議できることが分かった。（日頃、このような学生とあまり接していないということです）
●学生の生の声が聞けた。学生や他の教職員とのディスカッションから、固定観念を離れる思考ができた。
●学生の生の意見
●意識の高い学生が案外いる。講義のアイデア

職員

●学生さんの考え方を具体的に知ることができて良かったと思う。今後の職場での活動に役立てたい。
●学生、職員それぞれの意見が聞けてよかった。
●学生の生の声が聞けてよかった。
●学生の学習への臨み方を知ることができた。
●大学の現状
●学生のニーズを直接聞くことができ、参考になった。特に、講義外の環境、学習支援体制について、実際の声を聞くことができた。
●学生の率直な考え
●学生が学習環境に求める生の意見
●学生さんの立場と教員の立場が理解できました。テーマが職員の立場からは少し遠かったため、あまり積極的な発言はできませんでしたが、それぞれの考えを知る機会となり、よかったと思います。

⑤ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

学生

- 自分だけだと思っていたことを、同世代の各学部の人たちと意見交換できてよかったです。
- 貴重な時間になりました。
- 教員の方が学生の大部分だとイメージする学生よりも、積極的な姿勢をもった学生がどうしても自主参加や教員からの推薦では多くなってしまう。
  もっと無作為に選ばれた人を集めないと、講義や学生の学習スタイルの改善にはつながらないと思う。正直、話し合いを進めやすい大学の中のごく少数を集めて行っているだけなら茶番。本来は、このワークショップに参加する気がなく、先生も推薦するのをためらうような学生の意見が必要なのでは。
- 一般学生、特に1、2年生が多く参加するようになるとまた違った意見が得られると思う。
- もっとこういう機会が増えたらいいなと思った。
- 学生がもっと参加していると思いました。今回の意見は、どの程度反映・改善されますか？
- せっかく貴重な意見がたくさん出たので、無駄にせず活かしてほしいです。テーマがよくわからなかったです。
- 話をするのに（ワークショップ）に夢中になって、お菓子の時間（ブレイクタイム）がとれなかったので、各班に用意するなどしてほしい。
- もう少しテーマを具体的にしたほうがいいと思う。テーマは②だったが、いまいち何がいいたいのか分らない。
- もう少しディスカッションをまとめるための時間がほしかった。
- 「教員と学生が対等で」話し合いを行う前提でしたが、学生側の討論への参加率が低く、先生方の方が活発だった気がします。こういった討論やグループディスカッションの場を多く（広く）設ければ、学生の主体性も磨かれるのではないかと思います。
- 今日はじめて“FD委員会”というものを知りました。今回のようなワークショップが開催されていることを知ることで、大学は私たち学生のためにいろいろ動いてくれているのだ、様々な機会が用意されているのだということがわかったので、参加できてよかったと思いました。
- 学生と教員の間に壁があり、それを除ければ、学生の主体性は向上するのではないかと考えた。他の学生、教員の生の声が聞けてよかった。
- もっと真面目じゃない層を無理やり（？）集めて、意見を言わせたらもっとおもしろくなると思う。
- このような機会をもっと増やしていくべきだと思う。
- 様々な立場の方と話し合いすることは初めてだったので、すごく貴重な体験だったし、社会に出ても役立つと感じた。このような機会はすごく良いと思う。
- 教員の皆さんとこのようにじっくり議論する機会はめったにないと思うので、このようなイベントをもっと大きく回数も増やしていくことで、大学が大きく変わっていくと思います。
- 何気なく参加しましたが、おもしろかったです。職員の方のお話が聞けて良かったです。
- もっと大々的に参加者を募るようにしていいと思います。
- 先生方の意見を聞くことができてよかったです。もっと自分のために努力しなければと思いました。文系の学生さんの意見も聞きたかったです。
- グループ討論を初めて行いましたが、非常に楽しく、他の学生や先生方と意見を言い合い有意義な時間を過ごせた。
- 実際教員と話せてよかったが、来ていない先生方はこれがあったことも知らずに、意見が反映されることなしに、これからも講義していくのか？分野問わず、いろいろな話ができてよかった。とても良い機会であったと思う。学科から必ず1人は教員に出てほしい。
- 討議の内容をもう少しわかりやすいテーマにすれば、具体的な案や意見が出たのではないかと思います。
- この場に来られる先生方は、教育に関して積極的な方ばかりで、話がしやすかった。しかし、実際に授業をする先生の中には、あまり積極的ではない方もいる。その差をどう埋めるかについても話ができたらよかったと思う。

教員

- 得られた意見をどう実施するか。
- 講演・事例紹介は、全てハンドアウトを準備した方がいいと思います。また、発表者のPPTはあらかじめ１台のPCに入れておくと、今回のような時間のロスを防げるのではないでしょうか。今回出た意見や発表内容が、どの程度取り入れられていくのか、今後が楽しみです。今回のまとめを、参加者に公開or資料配布してほしい。
- グループ討議では、活発な意見交換が行われるが、全体討議では全くと言っていいほど質問が出てこない・・・。ひょっとして参加者は自主的な参加者ではないのでは？
- Active Type学生とさぼりType学生の対応が異なるのではないか。
- 教員の参加がもっとあるとよいと思います。年配教員批判もありましたが、年配も若手もいるわけですから、どちらも参加してもらえた方が議論を深められると思います。
- これからも継続していただけたらと思います。できれば、もう少し参加者が多いと良いですね。
- 時間を守るようにした方が良い。（終了の）
- KJ法なども意見を速やかにまとめるときには、有効なのではと思う。
- 学生の生の声が聞けたことがよかった。
- 教員が多く参加することで、意義が高まると思います。
- 参加するのはハードルが高かったですが、とても有意義でした。できる限り、多くの教員の参加を望みます。（同じ教員が複数回ではなく、各教員が少なくとも１回は参加する）
- もう少し広い会場で実施していただきたい。となりのグループの話し合う声が気になり、自らのグループ内での話し合いに集中できなかった。
- 途中で10分程休ませてください。今日の成果を参加者以外にどう伝えるのか？そもそも伝えようとしているのか？アンケートを書く時間を設けられたことを評価します。
- テーマの提示の仕方にもう少し具体性があっても良いのではないか。
  休憩を取るタイミングを促してもらえればよい。
- もっと具体的なテーマの方が良い。時間が限られているので。

職員

- もう少し、学生さんの意見を引き出せたらよかったと思う。場慣れが必要かもしれない。事前にテーマについてまとめているとよかったかも。
- テーマごとの話し合いでしたが、最後の問題点等は同じような気がした。今日参加した学生さんは、意見（自分の考え）をもっているので、とてもよいと思った。
- 多様な意見が聞けるのは良いが、とりとめがない印象がある。
- ３時間は長い。机がほしい。
- もう少し具体的（目的を絞る）なテーマで討論をお願いしたい。
- あまり意見を言えていない学生もいたので、グループの人数をもう少し減らしてはどうか？と思った。
- 板書だったが、うまくまとめることができなかった。チームワークの大切さを学べた。グループワークに時間をもっと使えたら良いと思う。また、グループの構成で、教員・職員・学生がしっかりと入っていれば良いと思った。
- 現状の課題→問題点→提案（解決法）のようなフレームワークは最初にきちんと明示してほしい。様式を配るなど。
- ワークショップは、対等な立場でみんなが意見を交換、共有できるので、いい取組だと思います。もっと学生さんの意見を引き出せるよう、段階を踏んでテーマについて話し合えたらいいのではと思いました。

※今後、ＦＤ委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

学生

●学部・学科間を越えた学習
●学生、教職員ともに人数を増やし、大規模までとはいかないが、もう少し規模が大きくてもよいのではないかと思う。
●レジュメのデータをアップロードして、学生に印刷させる風潮を何とかしてほしいです。学習時間が削られていきます。
●生徒と大学との関係について（学生課など）
●清掃について取り上げてみて、改善していただきたいです。（現在、雇用しておられるので、お金がもったいない気がします）
●このような会を頻繁に、また時には学部ごとにすると、重要な課題が出ると思います。
●学科ごとの話し合い　・鹿大と他大学の違い　・専門分野ごとに話し合い

教員

●何でもいいですが、役にたつものをお願いします。
●TBL（チーム・ベースド・ラーニング）について
●学生さんの就職のために、情報が少ない。そのため、全学的に日経テレコン21を導入することを検討してもらいたい。
●学生に「理想の大学教育」について語ってもらいたい。
●学生と教員が濃密に関わりあうことが、学生の自主性を高めるために必要だとは思いますが、現在の大学の体制では難しいのではないでしょうか。今の教育体制を前提にして、学生が自主的に学習するようになるための対策にテーマをしぼったワークショップ開催をご検討いただきたい。大学生の子を持つ親として、即効性のある方策を望みます。
●学部を越えた授業参観。特に文系←理系、専門←共通教育

職員

●授業の参考資料「シラバス」について考える。　学生の意見を反映させる？アンケートの取り方。
●事務の意見が述べられるテーマも設置してほしい。

〈資料〉

学生･教職員ワークショップ「自主的な学習のできる学生を育成する教育の推進」事後アンケート

学生・教職員ワークショップ「自主的な学習 のできる学生を育成する教育の推進」　2013.12.17

事後アンケート

本日は、ワークショッ プへのご参加ありがとうございました。FD委員会では皆様のご意見を参考に活動を改善し、新たな企画を計画いたします 。皆様の率直なご意見をお聞かせください。

（選択の部分は、 □にチェック　番号を○で囲んでください。）

1．　□ 学生　□ 教員　□ 職員

2．本日のワークショップは有意義でしたか。

① 全くそう思わない　② あまり思わない　③ どちらでもない　④ 少しそう思う　⑤ 非常にそう思う

3．あなたは、積極的に参加しましたか 。

① 全くそう思わない　② あまり思わない　③ どちらでもない　④ 少しそう思う　⑤ 非常にそう思う

4．このワークショップに参加して、何が得られましたか。

5．ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

4. おわりに

事後アンケートを見ると、ワークショップを有意義だと受け止めた参加者の割合は総じて高く、全体のおよそ9割が「非常にそう思う」または「少しそう思う」と回答している。特に教員は、65％が「非常にそう思う」と回答しており、本ワークショップが貴重な機会になったといえよう。

今後、自主的な学習の重要性を、より多くの学生、教員に理解してもらうためには、このようなワークショップに、さらに多くの参加者を得ることが必要であり、そのための方策についても検討すべきであろう。また、ワークショップで得られた様々な提案を、単にこの場でのものにとどめず、実際に大学側に提案していくためには、議論のテーマを絞り、より具体的で建設的な提言を行うことをワークショップの目的とすることも考えられる。そして、自主的な学習の実現のためには、各部局でのFD活動が大きな鍵を握る。本ワークショップに参加した教職員、学生が中心となって、ワークショップで得られた様々な提案と必要な取組が、各部局に波及していくことが、最も重要であるといえるだろう。

今回のワークショップのような機会を積み重ねることにより、教職員と学生が、さらには異なる部局の教職員同士、学生同士が、対等な立場で率直に意見を交換し相互理解を深めることで、大学の目指す望ましい教育が実現されることを願ってやまない。

(文責：理学部　青木 敏)

鹿大版FDガイド第6号、第7号の発刊にあたって

今年度のFDガイド第6号、第7号は、FDガイドワーキンググループの安部恒久、小栗實、佐久間美明、松尾智英の4人でアイデアを交換しながら、素案を練り、教育推進係の前村泰子、仁禮晃子両氏のサポートを得て作成・刊行された。

以下では、FDガイドワーキンググループで、どんなことが議論されながら、FDガイドが作成されたのか、印象に残った議論を紹介しながら、報告を行いたい。

FDガイドに何を取り上げるかについて4人のワーキンググループで毎月、集まりをもち、時にはメールで意見交換を行った。その結果、これまでのFDガイド作成の流れを基本的に踏襲しながら、第6号では「シラバス」に関連したテーマで、教員の授業改善に直接に貢献することに焦点をあてようということになり、「授業外学習に関するヒント」を取り上げた。ただし、単に一般的な事柄よりも、鹿児島大学の学生の実際のデータから発信しようということになり、学生による授業評価をもとに各教員が記載した授業改善メモのデータを、佐久間美明委員が中心となってまとめた。

ただし、本年度からシラバス記載が全学的に導入された授業外学習の指示をめぐっては、FDガイド記載の「授業外学習強化」の強化のトーン（強さかげん）をめぐって、議論があった。結局のところ、それぞれの項目の配置の順序にも気配りを行い、トーンとしては、強くなりすぎず、また弱くなりすぎないものとして、出来上がった。

FDガイド第7号では「授業改善のためのヒント（2）」を取り上げることになった。すでに、FDガイドの第3号で「各教員が効果的な授業及び履修指導を行うためのヒント」が取り上げられており、その続編ということになる。ワーキンググループでの議論の結果、小栗實委員を中心に、参考となる図書を抽出し、教員に役に立つ要点を簡潔にまとめて読者に伝えることになった。

講義をよくする工夫のひとつとして、（1）キーワードの明示、（2）話し方の工夫、（3）質問の工夫、などとともに、（4）板書の工夫、も取り上げたが、はたして板書の仕方までFDガイドでお伝えしたほうが良いものか、そこまでは必要ないのではないかという議論がワーキンググループでは行われた。議論の結果、すでに先生方は十分にご存知かもしれないが、工夫していただく参考として、まずは全教員間で共通認識として確認する意味をも込めて記載することになった。

なお、ワーキンググループでは、中央図書館の協力を得て、「鹿大の授業を改善しよう」コーナーを、中央図書館１階フロアに設置し、FD活動に興味・関心のある方に、参考図書を展示し紹介する試みを行った。今後とも、このようなFD活動への理解を促進する試みは必要なのではないかと思われる。

（文責：臨床心理学研究科　安部 恒久）

「鹿大の授業を改善しよう」コーナー

FD ガイド第６号

FD ガイド第７号

共通教育における学習実態・学習成果に関する調査（2012年度 調査報告）

1. 2012年度調査

2010年度、2011年度と実施してきた「共通教育における学習実態・学習成果に関する調査」を2012年度も継続して実施した。

調査の目的は、①共通教育科目等を受講する学生の実態の把握、特に学生の基礎知識がどのようなものか、どのような学習ニーズをもっているか、②本学がこれまで行ってきたさまざまな教育改善の活動がどのような成果として現れているか、を把握し検証することである。

調査結果を分析することによって、教育改善の成果を確認し、効果的な教育改善の方法としてどのようなものが望ましいか、カリキュラム・教育環境のどのような整備が必要か、について明らかにしようとした。

2012年度調査は、全学FD委員会を実施者として、2011年度に入学した2年生（2012年度当時）を対象に、授業の際に教員に協力を依頼して、マークシート型の自記式回答票（調査報告書13～14ページ参照）を配布し、授業時間内に回収する方法で行った。調査時期は2012年12月～2013年1月である。

学部ごとの調査回答者数及び有効回答率は次のとおりである。FD委員会では、共通教育科目等を受講する学生の学習実態及び学習成果を把握し、アンケートを実施した。

学　　部	有効回答者数／在籍者数	有効回答率
法文学部	318／409	77.8%
教育学部	188／291	64.6%
理学部	130／199	65.3%
医学部	192／255	75.3%
歯学部	44／57	77.2%
工学部	352／537	65.5%
農学部	107／243	44.0%
水産学部	100／143	69.9%
合　　計	1431／2134	67.1%

2. 調査報告書の発行

調査報告書を2013年12月に発行し、本学の教員等に配布した。また、鹿児島大学ホームページ中の「教育・学生生活」カテゴリー内「鹿児島大学のFD活動」の中にアップロードして公表した。

鹿児島大学ホームページ＞教育・学生生活＞教育＞鹿児島大学のFD活動＞FD関係刊行物
（http://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd/print.html）

3. 調査結果の内容

アンケートは、例年同様に10項目の質問を行い、質問ごとに調査結果について分析コメントをつけた。各項目及びそのコメントは以下のとおりである。

【問1】基本事項

2010年、2011年調査とほぼ同様の傾向として、平均的に高校時の成績は「中の上くらい」以上が過半数を超えている。入学前の1日の学習時間も3時間以上が69%を示しているが、学習時間が1時間未満の学生も10%いることがうかがえる。入学動機では「鹿大が第1志望」は54%、そうでないが46%となっているが、現在の所属学部・学科への第1希望入学は77%と学部・学科を優先して入学してきた学生が多い。

【問2】日頃の行動・習慣・考え

授業にきちんと出席しているかという設問に「あてはまる」(「とても」と「少し」含め)と答えた学生の割合は80.5%で、授業にまじめに出席していることがわかる。ただし、単位が取りやすい授業を選ぶ傾向が見られる。クラブ・サークル活動への参加は56%が積極的。ボランティア活動への参加は相変わらず15%程度であった。

「健康に気をつけている」とする学生は72.7%で、学生の健康志向は強い。「社会への関心」は積極・消極がほぼ半分に分かれている。「読書する」学生は40.2%だが、「新聞を読む」学生は16%しかいない。

海外留学を経験したいと考える学生、国際感覚を身につけたいと考えている学生はそれぞれ52.4%、69.8%と半数を超えている。教養や専門的知識・技能を積極的に身につけたいと考えている学生が圧倒的に多い。一方、資格を取得したいと考える学生も74.1%と多く、就職などを見据えた「実学思考」が見られる。

特徴的な傾向は、85%を超える学生が将来に対して不安をもっていることである。就職難等の社会的な事情が反映していると思われる。自分の将来つきたい職業がまだはっきりと見据えられていない傾向もうかがえる。将来の不安と関係しているのか、自分に自信がもてない学生も70%程度いることがわかる。

【問3】共通教育科目等の受講状況及び予習・復習の時間

教養科目の予習・復習時間が1時間未満とする学生の割合は80.7%と依然として高く、まったく予習・復習しない学生が30.6%いる。反対に外国語科目は授業で当てられることがあるせいか、まったく予習・復習しない学生は英語が8.7%、第2外国語が12.0%と少なく、1時間以上２時間未満の学生が42.7%、38.4%、毎日2時間以上勉強している学生も英語で7.7%、第2外国語で10.6%いる。基礎教育科目では実験等レポート作成の課題があるせいか、毎日1時間以上学習する学生が教養科目に比べて多いが、それでもまったく予習・復習しないとする学生は20.8%存在する。すべての科目でまったく予習・復習しない学生の割合が相当数いることは注目を要する。

【問4】共通教育等の授業における学習の仕方

「授業内容について予習する」「先生に質問する」「自分でさらに学習する」の項目を能動的な学習態度とすると、鹿大生でこのような学習態度をとっている学生は15.3%～30.9%となお少数にとどまっている。一方、「ノートをとる」「資料をきちんと保管する」「宿題・課題を必ずこなす」の項目を積極的な学習態度とすると、67.9%～87.3%と、学生の中の多数を占める。この点に、現在の鹿大生の学習態度の現状がうかがえる。

能動的な学習態度であれ、積極的な学習態度であれ、いろいろな学習方法を実践した学生は、その習慣化が「十分に身についた」「少し身についた」と積極的に自己評価している。

【問5】共通教育科目等において受講した授業形態

「ディスカッションを取り入れた双方向型の授業」から「宿題が多く出される授業」までの授業形態は学生にとっては負担が大きいものであると受け止められているせいか、「受講した」とする学生は32.6～52.2%にとどまる。しかし、多彩な教育方法を取り入れた授業を受けたことによって知識や能力を獲得できたと自己評価する学生は多く、「とても役に立った」「少し役に立った」と評価する割合が高い。「一方向の講義」は27.1%の学生が「あまり役に立たなかった」「全く役に立たなかった」としている点がみられる。

【問6】共通教育において経験したこと

質問欄にあげられている授業方法は、いずれも授業改善の一環としてなされているものであり、このような工夫された授業内容を共通教育で経験した学生はおおむね学習動機が高まったと評価している。とりわけ「短期の海外研修」「自主ゼミ」「オフィスアワーでの質問」「合宿」「地域交流」を経験した学生は、学習動機が高まったと積極的評価をしている。「ミニッツペーパー」は学習動機の高まりにつながっているとする学生も多い。さほど評価しない学生も32.3%存在するが、教員からコメントつきで返却すると学習動機がきわめて高まることがうかがえるので、「ミニッツペーパー」はフィードバックと組み合わせることが重要であろう。

【問7】共通教育において入学時点と比べ変化したこと

「外国語を読み、書き、話し、聴く力」が落ちていると34.0%の学生が感じている。反対に「伸びた」と感じている能力は、「異なる考え方・価値観を理解する力」「情報を収集・分析して活用する力」である。前者については教養科目から、後者については情報科学科目から獲得したとしている。鹿児島大学では「進取の気風」を育むことを大学憲章で定めて、その育成に努めているが、「進取の精神」を表している「自ら進んで新しいことに挑戦する力」が伸びたとする学生は26.3%いた（その項目についての分析は「4　展開研究」の項を参照）。

【問8】共通教育の授業をとおして身についた知識・技能・態度

この欄に記載された知識・技能・態度についてはおおむね「身についた」と受け止められている。「科学技術・数理」に関する知識等が・「身につかなかった」とする割合が36.3%ともっとも高い。自らの専門分野に関連した基礎的知識・技能については「身についた」とする評価が高いことを考えると、文系学生に対する科学技術・数理教育のわかりにくさといった問題があるのかもしれない。

【問9】今学期（4期）中における各活動の一週間あたりの平均時間

新しい調査項目としてインターネット、SNS利用にかける時間を調査した。その結果、まったく利用していない学生は3.6%にすぎず、ほとんどの学生が「友人等とのつきあい」と同じくらいの時間をつかっている。1週間16時間以上（1日2時間以上）をインターネット等につかっている学生が19.0%いる。反面、「読書・新聞」等を読むことに時間をつかっている学生は少なく、まったく読んでいない学生も15.3%いることがわかる。

【問10】鹿児島大学に対して

鹿児島大学に対する学生の満足度を表しているが、一番、評価が高いのは「クラブ・サークル活動の活発さ」であり、施設等や教職員の対応等にもある程度の好意的評価がみられるが、「相談できる体制」づくりは遅れていることがわかる。本学のイメージについて「鹿児島大学は開放的で活気がある」は3分の2程度が好意的評価をもっているが、「鹿児島大学は常に新しいことに挑戦している」とはみていない学生の割合が高い。

4. 展開研究～「進取の精神」をもった学生を育てるために～

本年度調査報告では、鹿児島大学では「進取の気風」を育てることを全学の教育目標の1つとして掲げていることから、「展開研究」として、【問7】で「自ら進んで新しいことに挑戦する力」が伸びたと回答した学生を「進取の精神」をもった学生と想定して、その学生が他の質問にどのような回答をし、それが他の学生とどのような違いがあるのかを調査した。その分析によって、「進取の精神」をもった学生を育てるには、どのような教育改善が必要であるかを検討しようとした。

その結果、このような「進取の精神」をもった学生には以下の傾向があることがわかった。

(1)「鹿大生であることに誇りを感じている」比率が高く、参加した数は少数であるがボランティア活動への関心等も高い。反面、「自己の将来に対して不安がある」とする比率が低い。

(2)「ディスカッションを取り入れた双方向型の授業」「少人数クラスでの議論」等の工夫された授業形態を受講した割合が高く、「とても役に立った」「役に立った」とする積極的な受け止めがみられる。

(3)「共通教育の授業をとおして身についた知識・技能・態度」をみても、すべての項目で「十分に身についた」「身についた」と自己評価している割合が高く、鹿児島大学に対しての満足度も他の学生に比べて高い。

(4)学生が、共通教育において一方的な講義型ではなくていろいろな工夫がなされた授業に接して、学習意欲を一層かきたてられて、実際に各種の授業形態に取り組み、授業に対する自己満足度も高く、「自ら進んで新しいことに挑戦する力」が伸びたと感じている。

こうした調査結果から、鹿児島大学としては、学生が主体的に授業に参加する工夫がなされた授業を増やすこと、双方向や議論などを含む授業の受講を勧めていくこと、主体的に授業に取り組ませることによって、学生自ら自分の能力が高まったという自信・自覚を強めていくこと、さらに海外留学、ボランティア活動への参加などを促していくこと等が、「進取の精神」をもった学生の育成につながっていくのではないだろうか。

5. 3年間の調査結果の総合分析

2010～2012年と3年間かけて、共通教育の学習実態・学習成果の調査を行ったので、その3年間の調査結果から浮かび上がった鹿大生の学習実態の主な特徴を以下のようにまとめた。

■ 基本事項

鹿児島大学に入学した学生は、高校での成績は「中の上」以上だった学生が過半数を超え、入学前の一日の学習時間も3時間以上が67%～69%を占めているが、学習時間が1時間未満の、学習習慣が十分に身につかないまま、大学に入学した学生も10%～12%いる。

■ 日頃の行動

91%～92%の学生は授業へはきちんと出席している。クラブ・サークル活動に積極的に参加している学生は53%～56%、アルバイトに力をいれている学生は57%～58%である。ボランティア活動への参加は14%～15%と総じて少ない。

■ 習慣・関心

社会の動きに関心があるとする学生は51%～57%であまり積極的とはいえず、新聞は16%～20%の学生しか読んでいない。読書も半数はさほどの関心をもっていない。自分の健康には留意していることがうかがえる。

■ 在学中の抱負

教養と専門的知識を身につけたいと考えている学生が多い。その反面で、海外留学などに積極的に取り組んで国際感覚を身につけたいと考えている学生の割合は少ない。まじめに授業にとりくむが、対外的な積極性がやや足りないと思われる鹿大生の平均的な傾向がうかがえるのではないか。

■ 将来について

8割を超す学生が将来に対して不安をもっている。就職難等の社会的な事情が反映していると思われる。45%～48%の学生が自分の将来つきたい職業がまだはっきりと見据えられていない。

■ 受講状況

外国語・基礎教育科目を除いては予習復習時間が1時間未満という割合が多く、教養科目、情報科学科目、体育・健康科目では授業外での学習が少ない傾向がある。外国語科目（英語・第2外国語）では半数は1時間以上学習し、毎日2時間を超えて学習している学生も少なからずいる。

■ 学習の仕方

授業に積極的にかかわった学生は、「身についた」とする自己評価度が高い。授業で出された課題は必ずこなし、授業で配布された資料等はきちんと保管し、授業中にノートをきちんととるなど、まじめに授業に参加していることがうかがえる。しかし、「教員に質問する」、「興味をもったところを自分でさらに学習する」といった、さらに積極的なかかわりには至っていない傾向がうかがえる。

■ 受講した授業形態

学生が主体的にかかわる「双方向型」「受講生による発表が中心」「グループワーク」「実習・実験・調査」などの授業を受けた学生は、「役に立った」と高く評価している。教員による一方向の講義型の授業についても72%～75%の学生は「役に立った」と感じており、それほど評価は低くない。しかし、25%～28%の学生が一方向講義型授業に消極的評価しか与えていない点も注目を要する。

■ 入学後の変化

「外国語を読み、書き、話し、聴く力」が落ちたと感じている学生が3分の1程度いることがこの3年間の調査を通じて明らかになった。教養科目は「異なる考え方・価値観を理解する力」「物事を論理的・多面的に考える力」「社会規範に従って行動する力」等の育成・向上に役立っていることがわかる。

■ 学生の一週間の活動時間

授業に関係した学習時間はさほど多くなく、読書等にかけている時間も少ない学生が多い。アルバイトは1日3時間を超えている学生が15%～18%いる。インターネット、SNSを利用していない学生はほとんどなく、かける時間もかなり多い。

■ 鹿児島大学について

施設について図書館や情報端末室をはじめ施設設備に対する満足度は高い。教職員の姿勢に対してもおおむね評価は高い。しかし、学生の相談体制の整備については、まだ広報上知られていないせいか、満足度が低い。

（文責：司法政策研究科　小栗 實）

学生支援研修会

1. 概要

日　時　平成26年3月26日(水)　14:00～16:00
場　所　郡元キャンパス　農・獣医共通棟1階　101号教室
参加者　100名
対　象　各学部の教務担当教員及び学生生活担当教員、各学部の新入生クラス担任等教員
FD委員、各学部の学生系職員・学生部職員、その他参加希望の教職員

2. はじめに

大学進学率が50%を超え、学生の多様化が進んでいる。大学入学までの経歴や学力の問題から授業についていけない学生も増え、それが原因で不適応や留年・中退といった事態が引き起こされることもある。また、新しい生活環境や人間関係に馴染めず、孤立してしまう学生も少なくない。問題を深刻化させないためには、特に入学直後の時期に適切な支援が重要である。

本研修会は、学生の学修成果向上や学生生活の充実に向けて教職員に期待される役割や適切な支援方法について理解していただくことを目的とする。そこで、平成26年度の各学部の新入生クラス担任教員、教務担当教員、学生生活委員の教員、FD委員の教員並びに学生系職員を中心とした皆様の積極的なご参加を期待して、平成26年3月26日(水)14:00より農・獣医共通棟1階 101講義室において「平成25年度学生支援研修会」を開催した。参加者数は100人(教員:77人、職員:23人)であった。

3. プログラム

司会進行:伊藤 奈賀子(FD 委員)

時　間	内　容・担　当
14:00～14:10	開会挨拶 清原 貞夫(FD 委員会委員長、教育担当理事)
14:10～14:40	本学の学生支援体制について 講師:前田 芳實 学長
14:40～15:30	保健管理センターの学生相談、学生支援 講師:川池 陽一(保健管理センター 准教授)
15:30～15:40	閉会挨拶 飯干 明(教育センター長)

4. 内容

はじめに清原貞夫FD 委員会委員長（教育担当理事）から講習会の趣旨説明を含めて開会の挨拶があった。

続いて、前田芳實学長から、「本学の学生支援体制について」と題して、学生の潜在能力の発見と適性の開花に努めることが鹿児島大学の学生支援であるという内容で、学生の自主自立（自律）を土台にして進取の精神を備えた人材の育成が目標であると宣言された。

次に、保健管理センターの川池陽一准教授から「保健管理センターの学生相談、学生支援」と題した講演があった。講演では、1年生を対象にした分析として、「つまずき・悪循環モデル」の提唱と紹介があった。つまずきは、①一人暮らし学生の私生活破綻型、②大学生活の戸惑い型、③不本意入学型、④基礎学力不足型、⑤大学流学問への戸惑い型の５タイプに類型化でき、それぞれについての説明があった。また、悪循環には、①学内での孤立化、②情報不足による二次的な不適応、③家族との関係悪化という悪循環の流れがあり、それぞれについて説明があった。いずれにおいても教員、大学並びに家族が連携を図り、「みんなであなたの将来を考えている」という姿勢を本人に伝えることが大切であると締めくくられた。

最後に、飯干明教育センター長より閉会の挨拶があり、本研修会を終了した。

5. まとめ

本研修会では、前田学長の「本学の学生支援体制について」の思いを聴くことができる貴重な機会となった。そしてさらに、学長ご自身の教育・研究に関する体験談をご紹介いただき、学長の学生を大切にする思いが参加者に伝わったと思われる。また、川池先生の講演は、多様な不登校学生の類型化と特徴づけがなされていて、それらへの対応の仕方について有意義なアドバイスをいただいた。講演後の質疑やコメント、そして終了後のアンケート結果では、新入生に対しても同様に川池先生の講演を聴ける機会を企画・開催して欲しいという要望が出されるほど有意義な研修会であった。

（文責：水産学部　小松 正治）

教育センター高等教育研究開発部（共通教育）のFD活動

1. はじめに

平成25年度の高等教育研究開発部は、前年度からの引継ぎ事項及び教育センター年度計画を基に活動計画として以下を掲げた。

・授業アンケートの実施（中間アンケートを含む）
・授業改善メモの集約及び教育センターホームページ等での報告
・共通教育の授業公開・授業参観の企画・実施
・教育センターオープンクラスの企画・実施
・共通教育における学習実態・学習成果に関する調査の結果に基づく教育改善の検討
・教学IRシステム構築に関する情報収集と検討
・共通教育新カリキュラムの評価実施

また、これらの活動を進めるにあたって、従来のWG方式を見直し、各項目を委員全員で検討することにした。これは、WG方式には活動計画の効率的実施等の利点はあるものの、どのWGに参加するかによって委員の負担が不平等になる場合があることと、あるWGで作成された案を全員で議論する際に、担当WGへの遠慮等から、自由な意見交換が妨げられる可能性があることに配慮したためである。

全員参加方式による部会運営をより効果的に行うため、報告事項等の枠組みで勉強会を行うことにした。「新カリキュラム評価のためのカリキュラムマップ」「工学部のカリキュラムと教育実践」「データに基づく共通教育の現状と課題」「認証評価と内部質保証」「中教審答申の解説」等のテーマで平成25年度は行っている。

2. 授業アンケート

共通教育で行われるアンケートは、授業の途中で行われ、その結果を授業担当者が見て授業改善に活用する「中間授業アンケート」と、授業終了時に行われて結果を全学的に集約する「期末授業改善に資するアンケート」の二つがある。中間授業アンケートは、途中まで受けた学生の意見を聞くことによって、後半の授業に生かすことにねらいがある。なお、独自の方法で担当教員が中間アンケート等を行っている場合には、「中間授業アンケート」を行う必要は無い。

全学的に集計が行われる「期末授業改善に資するアンケート」は平成25年に、前期が対象科目数460のうち391科目、後期が同355のうち287科目で実施された。実施率は、81～85%にのぼる。なお、Moodleによってアンケートを行った科目は前期が87で、後期は55であった。集計結果を見ると、「学習目標を達成できましたか」の設問に対し、「そう思う」または「強くそう思う」との解答が多く、学生の自己評価は高いと考えられる。ただ例年どおり、「授業に関連した内容について自主的に学習しましたか」の設問に対しては、「あまりそう思わない」の解答が他の設問と比較して極端に多かった。

なお、平成25年度後期からは共通教育カリキュラムの評価に役立てるため、新たに「共通教育の学習・教育目標とこの授業のつながりは分かりましたか」「専門分野に偏らない知識・技能の習得に役立ちましたか」という二つの設問を新たに加えた。また、「シラバスから具体的な学習目標のイメージを描くことが出来ましたか。」という設問を「シラバスからこの科目の学習目標は理解できましたか」に、分かり易く変更した。

3. 授業改善メモ

「期末授業改善に資するアンケート」の集計結果は、共通教育担当教員に送付され、各担当教員はそれに基づいて「授業改善メモ」を記載し、高等教育研究開発部会に提出される。高等教育研究開発部会では「授業改善メモ」を集約・分析し、webサイトで公表する。平成25年度においては、これら「授業改善メモ」に関わるFD活動に関し、いくつかの変更を行った。一つは、「授業改善メモ」の様式変更である。平成25年度前期末に行われたアンケートに基づく分からは新たに、「中間授業アンケート」と「共通教育改革」に関わる意見を共通教育授業担当教員に書いていただいた。また、高等教育研究開発部会内での作業分担も変更した。従来のWG方式から、部会委員全員が手分けして全ての「授業改善メモ」に目を通し、多くの授業担当教員に役立つかどうかという視点を中心に、重要なメモを抽出した後、それを基にとりまとめ担当委員が記名記事を書くことにした。さらに、抽出された「授業改善メモ」の内容は、教育センター共通教育企画実施部を通じて、各科目専門委員会に提出された。

4. 授業公開・授業参観

平成25年度においては前期4科目、後期12科目の授業が公開され、参観教員数は前期4人、後期12人であった。なお、後期の授業参観者の多くは、特定学部が共通教育とコミュニケーションを図るための組織的活動の一環として参加した。教員の自発的な意思に基づく授業公開・授業参観への参加は低水準に止まっているのが現状である。

高等教育研究開発部会内では、各学部における授業公開・授業参観の実施状況を部会委員から披露していただき、改善案を検討する等を行い、教育センター会議等の機会に参加を依頼する等の活動を行ってきたが、自発的な参観者数の増大には繋がっていない状況である。抜本的な改善が必要であろう。

5. 教育センターオープンクラス

教育センターでは、一般市民に、授業見学や施設見学等を行っていただく「オープンクラス」を例年行っている。平成25年度は11月25日～29日にかけて授業見学が行われ、11月30日を中心に施設見学と交流会が行われた。授業見学18人、施設見学21人の参加があり、両方の見学を行った市民の方が5人だったので、合計34人の参加者であった。

本年度のオープンクラスでは、授業見学を行った市民の方にお願いしているアンケート様式を変更し、従来は「授業を見学されてのご感想、ご意見等ございましたらお書き下さい。」だったものを、「学生の授業態度（熱心さ）」「授業が学生にとって分かり易いと思うか」「今回の授業はあなたにとって役だったか」「感想、意見」に分けて聞くようにした。アンケート結果を見ると、授業は学生にとって分かり易く、見学者にとっても役だったが、学生の授業態度（熱心さ）は、「やや熱心さが足りない」という回答が目立っていた。自由記述欄では「楽しい講義でしたので、学生には、いねむりをせずに話を聞いたらいい時間になるだろうと思います。」というものもあった。

反省点として、オムニバス形式の授業を見学した市民から「話しを聞きたかった方とは違う先生の話だった」という意見があった。見学希望者向けの「公開科目一覧」では、ほとんどの科目に1人の担当教員氏名が掲載されているだけであった。オープンクラス当日の担当教員を事前に全て把握して広報することは難しいが、複数の教員で担当する科目かどうか判別できる資料を用意し、当日の担当教員については問い合わせて欲しい等の注意書きを挿入すべきだったかも知れない。

授業見学の様子

施設見学の様子（かごしま丸）

6. 学習実態.学習成果に関する調査

平成25年度には、高等教育研究開発部会委員2名が参加したFD委員会のFDガイド、実態調査WGで「鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012年度調査報告」が作成され、平成25年12月に発行された。本調査は3年間かけて鹿児島大学の2年生を対象に行われた調査の最終年度版である。調査対象者の67%にあたる、1431人が有効回答者となった。

本報告書の作成において高等教育研究開発部会委員から「『自ら進んで新しいことに挑戦する力』が伸びたと回答した学生が、他の質問にどのような回答をしているか分析してはどうか？」という提案があり、実施された。その調査結果から「鹿児島大学としては、学生が主体的に授業に参加する工夫がなされた授業を増やすこと、双方向や議論などを含む授業の受講を勧めていくこと、主体的に授業に取り組ませることによって、学生自ら自分の能力が高まったという自信・自覚を強めていくこと、さらに海外留学、ボランティア活動への参加などを促していくこと等が、「進取の精神」を持った学生の育成につながっていくのではないだろうか（前述の報告書抜粋）」という結論を導くことができた。本報告書の内容は、高等教育研究開発部会でも報告された。

7. 教学IRシステム

教学IRシステムについては高等教育研究開発部専任教員が中心になって教育担当理事の諮問機関であるIRコンソーシアムWGで検討されると共に、教育改革室等でも諮られた。種々の議論を行った結果、平成24年に入会した大学IRコンソーシアムによるアンケート結果の分析を、平成26年度からは高等教育研究開発部が担当することになった。

平成24年度に試行的に実施した鹿児島大学1年生200人に対するアンケート調査結果の予備的な分析からは、鹿児島大学の学生は「取りたい授業を履修登録できなかった」経験が「ひんぱんにあった」り「ときどきあった」学生の割合が、他大学と比較して多いことが明らかになった。今後は、5節で述べた学習実態・学習成果に関する調査との比較に留意すると共に、特定他大学との詳細な比較や、大学IRコンソーシアムで重視されている英語学習に関するデータ分析等を、他組織と連携しながら進めていきたい。

8. 共通教育新カリキュラムの評価検証

平成25年度からの共通教育改革に伴い鹿児島大学の共通教育は新カリキュラムに移行した。本部会では新カリキュラムの評価検証を、教育センター共通教育企画実施部等と連携しながら行った。

本年度の評価検証においては、まず、旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行がスムースに行われたか、問題は生じていないかを中心に行った。新カリキュラムにおいては、共通教育選択科目（旧教養科目）をa.実践・判断・精神力、b.知力（人文・社会科学）c.知力（自然科学）の3大分類に分け、学生は卒業のためにそれぞれ4または6単位以上取得するように定めている。また、留学生も多くの学部では日本人学生と同様に大分類ごとに4または6単位を取得しなければならない。旧カリキュラムの教養科目分類が5分野（分野1（思想と文化）、分野2（社会と歴史）、分野3（人・生命・環境）、分野4（自然と数理）、分野5（科学・技術と応用）に分かれる）及び人間教育科目と導入教育科目に分かれていたのに比較すると、新カリキュラムはシンプルで分かり易くなっている。一方で旧カリキュラムでは、理系科目と文系科目が併存する分野3や分野4から受講科目を選ぶことによって、学部での自分の専門分野に近い教養科目を多く取ることによって卒業単位を取得する学生もいたようであり、新カリキュラムへの移行に伴い幅広い科目を名目上ではなく、実際に取らなければならないことに伴う不安も聞かれた。平成24年度における教育センター会議等でも、専門外の学生でも理解しやすい単位を増やす必要がある等の議論があったのである。また、従来は外国人留学生の場合、教養科目は分野に関わらず、単位数だけ決められたとおりにそろえれば良かったが、前述したとおり、新カリキュラムでは多くの学部・学科で日本人学生と同様の幅広い分野での単位取得が求められる。

そこで今回の新カリキュラム評価検証においてはまず、旧カリキュラムと比べて学生の履修が幅広い分野に変化しているかどうかをデータに基づいて調べることにした。また、幅広い分野での単位取得を制度化すると、不本意受講学生が増えて、一部学生の不合格や成績悪化、及び授業全体の雰囲気や平均的な学修行動の劣化等が発生する可能性もある。そのような状況が生じているかを確認するため、共通教育のGPAに基づく助言・指導（学期GPA値が1.5未満、又は修得単位数第1期10単位未満、第2期6単位未満のものが対象）データを検討すると共に、「授業改善メモ」で新カリキュラムに関する意見を各科目担当者に記載いただき分析した。

表1は、各学部の共通教育科目受講者が平成24年度と平成25年度にどの分野の選択科目（旧教養科目）を受講したかを示したものである。24年度と比べて、新カリキュラムが適用された25年度には各学生が各分野の科目をまんべんなく取得しようとしている傾向が読み取れる。学部毎に特定の科目・分野に集中しがちな傾向を改善するのに、新カリキュラムへの移行は一定の効果をあげていると考えられる。

表1　中分類別・学部別受講者のべ数の推移

H25前期

分　類	科目数	受講者数	学部別受講者数（一般学生）									学部別受講者数（外国人留学生）								
			法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水	法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水
実践・判断・精神力	56	3141	732	551	234	497	104	516	287		214			3	2		1			
知力（人文・社会科学）	44	3315	1054	558	213	466	124	451	265		175	3		1	2		2	1		
知力（自然科学）	23	1563	377	298	180	180	52	223	139		112	1					1			
人文・社会科学系	6	65								65										
自然科学系	6	71								71										
総合教養系	3	21								21										

H25後期

分　類	科目数	受講者数	学部別受講者数（一般学生）									学部別受講者数（外国人留学生）								
			法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水	法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水
実践・判断・精神力	43	2354	523	289	201	365	86	345	341		194	3	2	1	2		2			
知力（人文・社会科学）	43	2850	736	299	304	362	45	532	397		162	6	3		1		1	2		
知力（自然科学）	31	1996	367	221	114	332	90	471	217		177	1	1	2	1		2			
人文・社会科学系	5	42								42										
自然科学系	4	26								26										
総合教養系	2	11								11										

H24前期

分　類	科目数	受講者数	学部別受講者数（一般学生）									学部別受講者数（外国人留学生）								
			法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水	法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水
実践・判断・精神力	58	3262	691	558	223	572	117	542	307	19	211	11	1				10			
知力（人文・社会科学）	43	3237	1170	515	236	430	107	349	222	74	119	10					5			
知力（自然科学）	25	1782	329	361	174	156	47	294	227	74	114	4					2			

H24後期

分　類	科目数	受講者数	学部別受講者数（一般学生）									学部別受講者数（外国人留学生）								
			法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水	法文	教育	理	医	歯	工	農	共獣	水
実践・判断・精神力	46	2618	527	283	245	431	107	515	279	16	195	6	1				13			
知力（人文・社会科学）	43	2861	880	284	300	440	69	400	305	18	148	8	4				5			
知力（自然科学）	35	1624	185	204	181	103	50	415	317	13	155						1			

一方、平成25年度前期成績と平成24年度前期成績を比較すると、助言・指導基準より共通教育の成績が低い者が新カリキュラムの結果、特定の学部学科や留学生において増えたという事実はなかった。また、成績不振の理由をみると、「勉学不足」「アルバイト、サークル等による基本的生活の乱れ」「勉学意欲低下」等が多く、「苦手科目がある」という理由を上げた者はなかった。さらに、各授業担当教員に記入していただく「授業改善メモ」様式には、「本年度から実施している共通教育改革についてご意見・ご提案がありましたら是非ご記入ください」と記載したが、「本年度から不本意受講生が増えて、授業実施に支障を来している」等の意見は皆無であった。

以上より、共通教育改革に伴う学生の取得授業変更はスムースに行われ、以前より幅広い分野の履修がみられるが、特に問題は起きていないことが確認された。

一方、共通教育の評価検証を行う際には、新カリキュラムに伴う短期的な変化を考えるだけではなく、中長期的視点から、授業担当者の継続的確保状況、「学修教育目標」→「カリキュラム」→「各授業」の整合性、共通教育に対する学生の認識と行動、共通教育と専門教育の連携、等に関して広く検討する必要もある。平成25年度は関連する各種データを収集すると共に、1、2年生の学生を対象として、「共通教育カリキュラムに関する学生アンケート」を平成26年1月に実施した（表2）。

最後に、データ収集等にご協力いただいた教育センター共通教育企画実施部、共通教育係、情報企画課及びアンケート調査等にご協力いただいた全ての皆様に深謝いたします。

表2　カリキュラムアンケート

学部選択	法文学部	教育学部（学校）	教育学部（生涯）	理学部	医学部（医学科）	医学部（保健学科）	歯学部	工学部	農学部	水産学部	共同獣医学部
24	3	1	0	5	0	0	0	2	1	4	0
25	24	9	0	9	6	3	1	16	11	6	0
合計	27	10	0	14	6	3	1	18	12	10	0

男女選択	男　性	女　性
24	9	5
25	42	34
合計	51	39

入学年度選択	24年度入学	25年度入学
	16	85

選択科目を選ぶ基準を一つ選択	学部の勉強に役立つ	就活に役立つ	社会に貢献できる意思と能力が得られる	単位が取りやすい	秀や優が取りやすい	その他（具体的に）
24	7	0	1	2	1	4
25	18	1	13	21	1	17
合計	25	1	14	23	2	21

「その他」を選択した方は記入

24	評価が試験ではなく、レポートであること 分野と開設時間と興味を総合して。 興味がある･面白そう 必修の間に受講できるか。内容に興味を持てるか。
25	興味があるから 自分が興味を持つことができる 興味がある科目 興味があるから 興味がある シラバスを読んで興味がわくもの 自分のやりたいと興味をもったものをとるようにしています。 興味のある分野の中からシラバスを参考に選択 自分の興味があるもの 自分が興味関心がある分野をよく選びました。 自分の趣味、興味にあったもの 専門教科との時間割の調節 興味があるかどうか 自分の興味あるものを中心に選ぶ。 興味がもてるもの 自分が興味のあるもの。 専門以外に自分の興味のある分野を勉強できる 興味のある内容かどうか

①各科目の定員を超えて受講希望者がいた場合は、抽選により登録者を決定する。	望ましい	望ましくない	その他（具体的に）
24	9	3	3
25	38	41	4
合計	47	44	7

「その他」を選択した方は記入

24	抽選はいいが工学部から優先してとるなど、大変だと思われる学部を優先してほしい。 特に工学部の場合、授業の被りが多いから。 社会人を入れるぐらいなら、その枠を在学生に作るべき。 その単位を取る必要性の高い順に登録者を決定するのが望ましい。
25	望ましくは感じるが、抽選のやり方を受講希望者にも発表してほしい。 授業を実施する教室が定員を超えても収容可能な場所である場合は、望ましくない。 抽選という方法は仕方がないが、入学時からの「抽選もれ」の回数を考慮する事で不公平感をなくしてほしい。 望ましいとも思うし、望ましくないとも思う。 抽選をするのは平等でいいと思うけど、1つしか落ちない人やほとんど落ちる人がいたりと、結果だけ見ると偏っているように見えるし、ほとんど落ちてしまうと、単位に関する予定が大幅に狂うから。

②共通教育科目は特定の曜日・時間に集中している	望ましい	望ましくない	その他（具体的に）
24	4	11	0
25	29	53	1
合計	33	64	1

「その他」を選択した方は記入

24	単位がとりづらい　月曜日や午後も増やすべき

③平成25年度入学生から選択科目は三つの中分類（a実践・判断・精神力、b知力(人文・社会科学)、c知力（自然科学））に分けられ、それぞれ4単位または6単位以上取得する	望ましい	望ましくない	その他（具体的に）
24	8	3	3
25	63	20	0
合計	71	23	3

「その他」を選択した方は記入

24	そうすることによって今までとどのように変わるのかわからないため、何とも言えない 分からない 24入なのでわからない。

④平成25年度入学生から選択科目は18小分類に分けられ、そこから受講科目を選択する。	18では多くて細かく分けすぎ	18では少なくておおざっぱすぎ	ちょうど良い分け方	その他（具体的に）
24	10	0	3	1
25	45	0	37	0
合計	55	0	40	1

「その他」を選択した方は記入

24	24入なのでわからない。

⑤上記の選択科目18小分類毎の科目数は多様である。（平成25年度後期は「生物学を学ぶ」が17科目で、「環境を学ぶ」は1科目）	望ましい	望ましくない	その他（具体的に）
24	8	5	0
25	51	30	1
合計	59	35	1

「その他」を選択した方は記入

⑥１～２年生では専門以外の勉強が中心	望ましい	望ましくない	その他（具体的に）
24	7	7	0
25	56	26	0
合計	63	33	0

「その他」を選択した方は記入

24	早い時期は深さより広さを重視して専門の勉強ももっと積極的にするべきである。
25	自分の学科では一、二年次から、専門と共通のどちらも学ぶ機会がある

i-①中分類選択	a 実践・判断・精神力	b 知力（人文・社会科学）	c 知力（自然科学）	d 身体力	e コミュニケーション力	f 専門基礎力
24	0	1	0	1	1	0
25	5	3	10	2	1	1
合計	5	4	10	3	2	1

i-②講義名	
24	コミュニケーション学 微生物学 栄養学
25	スポーツを学ぶ 錦江湾について 地理

i-③講義の簡単な内容と希望理由	
24	ひたすらプレゼン発表 食物の基本的な性質と調理の仕方について。食は毎日に関わることであり、また大学に入り自分で食事をする機会が増えたため、よりよい生活を送るのに必要だと思うから。 微生物の生態など
25	さまざまなスポーツの歴史やルールについて学ぶ 既存の地理学や地形図の講義とは異なる、高校地理の延長の講義内容。 様々な地域の民族、生活様式や自然、歴史を幅広く学びたいから。 錦江湾の歴史、環境について学ぶ。釣りをする。今までの講義では、桜島は、でるのに、鹿児島のシンボルと行っても良い、錦江湾は、全く取り上げられないから。

ii-①中分類選択	a 実践・判断・精神力	b 知力（人文・社会科学）	c 知力（自然科学）	d 身体力	e コミュニケーション力	f 専門基礎力
24	0	1	0	0	0	0
25	1	0	2	0	0	1
合計	1	1	2	0	0	1

ii-②講義名	
24	桜島の歴史

ii-③講義の簡単な内容と希望理由	
24	いまからおこるであろう噴火における対策等学べたらうれしい

iii-①中分類選択	a 実践・判断・精神力	b 知力（人文・社会科学）	c 知力（自然科学）	d 身体力	e コミュニケーション力	f 専門基礎力
24	0	1	0	0	0	0
25	0	1	2	0	0	0
合計	0	2	2	0	0	0

iii-②講義名	
24	心理学

iii-③講義の簡単な内容と希望理由	
24	普段何気ないともさころに存在する心理的特徴を、しれたらよい

3. 共通教育に関して意見・要望があれば自由に述べてください	
24	もう少し全体的に少なくても良い気がする。キャンパス間の移動が大変。 分野４、５について理系が受けられない講義が多すぎて、単位がとりにくい。規制を緩和してほしい。 シラバス内容がざっくりしすぎているものがある気がします。 出席を講義のはじめと終わりの両方で取るべき。
25	惰性で授業をする教授たちもいる。それでは、私たちの生活に役立たせることができない。授業をするならしっかりとしてほしい。 授業中の私語、携帯ゲーム、大幅な遅刻等の黙認を許さない雰囲気があると良いです。学生主体で作り出せればよいのですが。 あまりに偏った意見をもった講師の講義は聞いていて面白くない。また、学生を馬鹿にしたような発言(例えば、国立大学の学生は優秀だから…とか、講義で勝ち組・負け組といった言葉を用いる。)がみられる講師もいて、あまりよい気持ちのしない講義もある。できるなら講義を心地よく受けたい。 英語を話したり、聞いたりする授業をもっともっと増やすべきだと思う。 私が選択した共通教育の講義は、ほぼ全て私の専門分野ではないものでした。しかし、社会生活を始める前に身に着けておくべき知識を得ることができ、一年間共通教育を受けて良かったと思っています。 共通教育の中でその講義について専門的な知識を問うためテストを行うことが有るが、講義に人数制限があり、さらにabcで決められた単位数を取らなければならないので興味のない講義でテストを受けるのは嫌だ。

(文責:佐久間 美明)

高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	佐久間　美明
教育センター　高等教育研究開発部	渋井　進、伊藤　奈賀子
法 文 学 部	朴　源
教 育 学 部	小柳　正司
理　学　部	内海　俊樹
医　学　部	下敷領　須美子
歯　学　部	菊地　聖史
工　学　部	本間　俊雄
農　学　部	枚田　邦宏
水 産 学 部	小松　正治
共同獣医学部	松尾　智英

II

鹿児島大学
の
FD活動

第2部

各学部・研究科の
FD活動報告